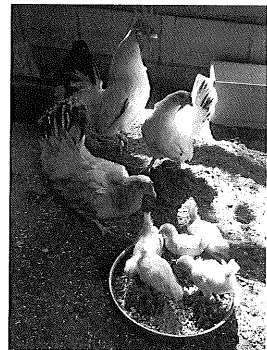


# 私の保育ノートから

## チャボが育ててくれました

吉岡晶子

(幼稚園教諭)



やりたくないな

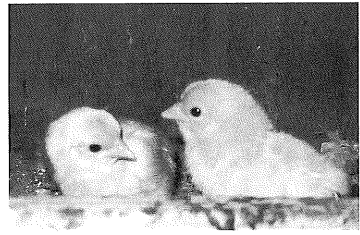
ある冬の日の朝、生きものがかりの一人が「いやだな……」とぼつりとつぶやきました。私は「そうなのね。寒いし、臭いし」と言うと、「うん」。生きものがかりのほかのメンバーにもうなずいている人がいました。私も気持ちはわかります。「でもね、待っていると思う」と言うと、「じゃあ行くか」と言つて鳥小屋に向かいました。鍵を外して扉を開けると、A夫が「あ、ほんとだ。待ってたー」と驚きの大きな声。みんなも見に行き、「並んで待ってたー」「こっち見てる」と感動の声。本当に五羽のチャボが、

入り口に並んで首を伸ばして見上げていました。私もびっくり。チャボがしゃべれるとしたら「おはよう、待ってましたよ。早く何かちょうだい」と言わんばかり。おなががすいているのね、遅くなつてごめんね、という気持ちになり、このタイミングで出迎えてくれたチャボに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

その日の生きものがかりは張り切つて野菜を刻み、お水を取り替え、小屋の中の砂をそれはそれははいねいにふるつてお世話をしたことは言うまでもありません。

## ひよこ誕生

本園（お茶の水女子大学附属幼稚園）ではここ数年、チャボが子どもたちの仲間になっています。昨年の夏休みにはヒナが五羽生まれました。お母さんチャボの羽の下に小さなひよこが



隠れているのを見つけた時には、お世話に来ていた子どもたちと驚き感動し、かわいらしくていとおしくてたまりませんでした。子どもたちには、暑中お見舞いの葉書に写真を載せて朗報を伝えました。

お父さん、お母さんチャボと五羽のひよこ、全部で八羽のチャボが鳥小屋で暮らし始めました。五羽のひよこ全員が無事に育つかどうか心配でしたが、すすくと育ち、二学期に子どもたちとご対面となりました。早々に、教師のほうからこのチャボ家族をこれからどうするか相談をもちかけ、みんなでお

世話をしようということになったのです。お世話をする人を「生きものがかり」と命名しました。この名前は教師のリクエストでもあり、子どもたちも耳慣れた名前なので賛成してくれました。そして六人一チームで毎日交代してお世話をするようになりました。

そのころの生きものがかりは毎日大張り切り。ひよこに会いたい触りたい一心だったのでしよう、登園するとすぐに鳥小屋に集まり、キャベツを細かくしたりお水を替えたりしました。もちろん個人差があり、「僕は鶏が苦手なんだ」と、ひたすら餌を用意する人、遊び相手に専念する人、とかかわり方はさまざまです。ボランティアの生きものがかりも参加し、鳥小屋は子どもたちでにぎわい、ひよこたちはみんなのアイドル



になり、愛情に囲まれていました。チャボについて詳しくなった人、抱き方のスペシャリストなど、チャボ博士が増えてきました。

## 継続期

数か月続いていると、状況が少し変わってきました。

した。飼育活動ではよくあることだと思えますが、なかなかメンバーが集まらなかったり、さつさとお世話を済ませるけれども中途半端になっていたりする日も増えてきました。

お弁当を食べながら「ほんとはいやなんだ……」「だってさ、遊びたいし」と打ち明けた人や、家庭でぼやいていた人もいて、「それでもお世話してたの?」と聞くと「うん」という答えが返ってきたこともありました。やってあげたい、やりたいからや



る、という時期を越えて「ねばならぬ感」で頑張った人もいます。小さくてかわいらしかったチャボも大きくなって突ついたりするし、抱きにくくなったりしてきたことも影響していたのでしょうか。

このような子どもたちの声は、生きものの向かい方、かわり方を考える大事な時期になってきたことの表れであり、本音を口にくれてよかったと思いました。順番だから仕方がない、義務感、そのような思いでお世話をしていると、「やりたくないな」という気持ちが始まることでしょうか。それを乗り越えて、単に仕事としてではなく、もう少し気持ちを掛けて携わってほしいと思いました。

そのような声がちらほら聞こえてきたころのやりとりが前述冒頭の場面です。本当に自分たちを待っていたんだと実感したあの日のメンバーは、チャボの気持ちに気付く、「やらなくては」と思ったことでしよう。やりたくてやる、仕事だからやるというのではなく、必要とされている、という気持ち、自覚になったと思いました。

## 転換期・使命感

数日後、お帰り前に集まっている時、何人かがチャボのことを話題にしていました。やはりあまり前向きではないような雰囲気でした。「でも、待っているのよね」と言うと、先日の生きものがかりの一員だったB子が「そうだよ。チャボは本当に待っているよ。入り口で」ときっぱり自信ありげに言いました。私も「そうよね」と相づちを打つと、「えっ、私の時にはいなかったよ」という声も聞こえてきました。「奥の方にいた」「出てこなかった」「上（高い所の棚の上）に乗ってたこともあるよ」など口々に言っていました。

その時、「でもね、キャベツのお皿を置いたらみんな集まってきたよ!」というC夫の大きな声。「餌（配合飼料）をあげた時も」という声も。私が「ということは何?」と言葉を続けると、「おなががすいてる」と大勢の子どもたちから返事が返ってきました。チ

ャボはおなかをすかせている、食べさせてあげなくちゃ、チャボは待っているということを実感したようでした。大げさかもしれませんが、自分たちが生命を支えているという使命感を感じたような気がします。

するとD夫の「先生、お部屋にも生きものがかりの印、付けようよ」と前向きな意見です（生きものがかりの順番表は廊下に掲示してある）。「そうね、そうしよう」と印になるものを探していると、またD夫が「黄色がいいよ」と発言。それを受けて「この黄色のマグネットでどうかしら」と見せると、「いいね」とみんなが同意してくれました。翌日の生きものがかりのチームメンバー表に黄色のマグネットを印を付けました。この時には、クラスみんながチャボへの思い、生きものがかりの意識を新たにしようでした。もちろん内心複雑な人がいたかもしれませんが、それも当然のこと。生きものに対しては得手不得手がありますから。

## 再出発

別のチームの日のことです。朝すぐにメンバーが集まりお世話が始まっていました。チャボを触るのは苦手なE夫も、恐る恐る抱き上げようとしたり、メンバーがそろっているか確認したりして、やる気が感じられました。そしてE夫は「F子ちゃんがない」と言って探しに行きました。でも、F子は竹馬をやっている時だったので、「あんまりやりたくないの」と消極的でした。この声もごく自然な気持ちの表れでしょう。でも、チームの一人が「F子ちゃん、この前言ってたでしょう。忘れたの?」と、先日 of やりとりのことを思い出させてくれました。仲間に後押しされて小屋に入ったF子は、まだほんのり温かい卵を手にして満面の笑みを浮かべ、その後はせつせとお世話に励んでいました。楽しくお世話を済ませた子どもたちはチャボを外に連れ出して「ふれあいどうぶつコーナー」の看板を掲げ、年少さんたちにも触らせてあげていました。生きものが

かりがステップアップしたようです。

また、別の生きものがかりの日にも変化を感じました。これまでお世話にあまり積極的でなかったG夫が朝早く鳥小屋をのぞき込んでいました。メンバーが集まるのを待っていたようです。「お友達を呼んでくる?」と声を掛けると、走って仲間を探しに行きました。口下手なG夫は自分の気持ちや考えていることを表現するのが苦手ですが、この様子からは、チャボへの思いと、仲間と一緒にやるんだという気持ちがあることが伝わりました。



これまでも当番活動や役割を担うことはさまざまな形で取り組んできました。取り組み始めは張り切っているのにだんだん要領が良くなったりルーティーン化して、これでよいのかな……と考えてしま

うことはたびたびありました。数か月チャボと暮らす中では、家族間で争ってチャボがけがをしたり、大家族には家が手狭なのでほかの幼稚園に里子に出したりといろいろな出来事がありました。日々の地味なかかわりを継続することこそ生きものと一緒に暮らすことの基本。チャボとのかかわりは長期間にわたり毎日続けてきましたが、担任にとっては毎日でも、子どもたち一人ひとりにとっては毎日ではありません。交代して取り組む中でモチベーションを保つこと、思いを継続することは結構難しいことなのだろうと思われました。

役割意識にもう一つ「必要とされている」「求められている」という意識が加わったようです。もちろん全員がそろってそう思うようになったのではないかもしれませんが、世話をしている時の雰囲気、空気が変わりました。「あーあ、いやだな……」と思ったこと、つまずきや戸惑いに向き合ったからこそ意識が変わったのではないのでしょうか。

ある日、卵が三個産まれました。見つけたメンバーは大喜びでみんなが見える場所に置き、「ひよこがうまれるかもしれません」というポスターを書きました。飾ってしまっただけは生まれないのですが、これまでも卵は産まれていきましたが、もっとあつさり受けとめていました。子どもたちの気持ちが出て見えたような気がして、夏の感動の日と重なって見えました。

時間はかかりましたが、いろいろなことを気付かせて、私たちを育ててくれたチャボに感謝です。チャボが話せたなら何と云うのでしょうか。話せないからこそ、わかってあげなくては、よく見てあげなくてはという気持ちにさせてくれたのでしょう。

